

ベストクラス選定理由書

作成者：酒井久斗、池田梨穂、高瀬沙椰、田邊奈緒美、中西麻裕、中村和憲、池田浩之

科目名称 : 教育情報メディア実習 (実地教育V) (①クラス) (担当教員名 : 鈴木 正敏、小川 修史)	
課程 : 学部	開講時期 : 後期
授業形態 : 実習	授業規模 : 31~80 人
インタビュー対象教員名 : 小川 修史 (実施日時 : 令和4年8月19日(金) 9:00~10:30 ; 実施場所: Zoomにより開催)	
インタビュー対象受講者名 : 仮屋 和香、浅原 知尋、岡野 江吏子 (実施日時 : 令和4年8月31日(水) 16:00~17:00 ; 実施場所: Zoomにより開催)	
<p>【担当教員へのインタビューより】 ※小川先生担当の授業(12回分)について</p> <p>学校で使用する電子教材の作成力・活用力を高める(基本的に授業中に習得してくれたら良いが、それよりは自分で調べて自分で習得できるようになることを目指している)とともに、思考の大切さを知ることをねらいとしている。そのために、前期の「情報基礎演習」において、パワーポイントを作成する課題では、テキストを使用しながら自主的に学ばせ、習得率をグループの総合点でつけると伝えている。また思考が生まれるための工夫としては、アクセシビリティ(授業中スマホを触っても良い等ルールの提示)とユーザビリティ(分かりやすい授業)で、誰もが苦痛なく参加できる状況を保障し、学生たちの学びに対するモチベーションを高めるようにしている。思考を生み出すための発問は基本的に学生のもっている概念(18年間生きてきたなかで培われてきたもの)に近い内容を探すようにしている。例えば18歳で興味のあることは恋愛であることが多いため、始めの講義ではモテ方についての話題を切り口に教師のコミュニケーションの基本について話すといったものである。さらに、電子教材の作成は個人作業であるが、ある程度グループ分け(クラスがバラバラになるように)を始めにしておくことで、学生同士の会話を生み出し、モチベーションを高めるようにしている。教師側も学生の個人作業時に机間巡視をして、学生と対等な関係を重んじながら、毎回の授業で学生全員と必ず2、3回雑談をするようにしている。そうすることで信頼関係ができ、学生が主体的となる。雑談を重ねることで会話がしやすくなり、気軽に質問できたり、深めるための質問が出てきたりする。また、個人作業の前に「おもしろい教材を作りなさい」といった+αの条件をつけることで思考をめぐらせて発話させるようにしている。これらの工夫を行うことで学生は、やらされ感ではなく、楽しみながら主体的に課題に取り組むことができ結果としてクオリティが高いものがたくさん出来上がってくる。しかし、オンラインによって対面での雑談ができなくなり、学生ひとり一人の個性が見えなくなった。そこで、発問に対するコメントをオンライン上で書き込んでもらい、ニコニコ動画システムのようにコメントが流れるようにし、それに対しラジオのコメンテーターのようにレスポンスする等、対話するための工夫を行っている。</p> <p>【学生へのインタビューより】</p> <p>とにかく面白く、誰もが受けやすいように配慮されている。良い意味で勉強という感じがせず一瞬で授業が過ぎ去ってしまう。1コマ目の授業だが出席することへのハードルがとても低く、むしろ授業の前にある鈴木先生と小川先生の雑談が聞きたくて早く行くようにした。小川先生の人柄から質問することに対して全く抵抗感はない。授業内容も分かりやすく、どうしても分からないことは自分で調べたらいいし、先生もそれを望んでいると思う。</p>	

オンライン上に自由にコメントを書き込むことができるため、対面より先生と信頼関係ができると思う。他の人がコメントすることでオンラインではあるけど一緒に授業を受けている感じがする。コメントしたら小川先生が元気になっていくから余計コメントしたくなる。他の授業では消極的な学生も積極的に参加していた。課題は自分が作成した教材を発表する機会があり、誰かを楽しませられるように作るのでモチベーションが上がり、レポートよりも取組みやすく楽しくできた。ICTが苦手な学生でも授業を受けることで、できるようになり、グループで取組むから上達し、最後の動画作成も一人で創り上げていた。

【総括】

先生が常に学生の立場に立ち、自分の授業を客観的に振り返り、学生の主体的な学びのためにたくさん工夫がされている。授業におけるねらいも学生に伝わり、学生もそれに自然と無理なく応えている。教員と学生の相乗効果で高められたクラスだと考え、ベストクラスに推薦する。